

## 足と理性——『精神現象学』序論における比喩の解釈——

菊地 惠 善

### 1. はじめに

思考や感情は、それが複雑になればなる程、あるいは、繊細になればなる程、言語的な表現なしには、自ら自覚することも、また他人に伝達することもできなくなる。哲学的な思考においてはなおさらのこと、思想内容と言語表現は分かちがたく密接に結び付いている。そこで、哲学のテキストの場合、それを読むことは何か結論めいたものを取り出すことではなく、テキストとともに自らも思考の道を歩むことだと言われる。

哲学者ニーチェは、自分の読者たるべき者の資格要件として「落ち着いて、慌てずに読むこと」<sup>(1)</sup>を挙げている。勉強や仕事のために書物を読む人は、時間を節約するために、枝葉を端折って結論だけを性急に掴みとろうとする。しかし、思考することは「長い道」を歩むことであり、目的地に一拳に到達することではない。予め目的地が知られているならば、「長い道」を歩みと辿ることは無駄であり、できるだけ早く、できるだけ労力を省いて目的地に到達することが最善ということになるだろう。だが、途中をとばすことは思考を放棄することである。なぜなら、目的地を探しながら、その目的地に向かって一步を踏み出すことが思考するということだからだ。

同様のことを哲学者ヘーゲルも述べている。要約したり評価したりするために書物を読む人が、いきおい書物の内容を目的や結果に求めたがるのに対して、ヘーゲルは、目的や結果が書物の全体を決して代表しえないことを次のように指摘している。「事柄はその目的において尽くされているのではなく、尽くされているのは実現においてのことであり、また結果も現実的な全体ではなくして、そうであるのは生成といっしょにされたときのことである。」<sup>(2)</sup>そしてさらにヘーゲルは、目的や結果に関わろうとする仕事は、読みの正確さや評価の的確さを必要とすることから一見難しい仕事であるかのように思われるという一般的な印象に反して、その仕事が意外にやさしい仕事であると断定している。「なぜとって、こんな仕わざは事柄に従事する代わりに、いつもそれを越えているからである。」<sup>(3)</sup>批評は作品を比較検討するために作品から距離をとらなければならないが、その距離は作品を見渡すために必要なものであると同時に、往々にして、作品の内容を粗雑に見過ごす危険をはらむものなのである。

今回この論文で私が解釈を試みようとするヘーゲルのテキストは、難解をもって知られるヘーゲルの哲学の核心をなすような箇所では決してない。むしろ、周辺に属する何気ない文章である。しかし、一見何気ない文章も、思考の論理や表現のスタイルを表している点では核心部に属する文章と全く変わりはない。むしろ、身近な話題を平明に語る場面の方が、核心的な思想を語る場面よりも、文章を書く人間の個性をより鮮明に表すと言うこともできる。ヘーゲ

ルという哲学者の息遣いが感じられるかどうか、問題のテキストを見てみることにしよう。

## 2. 問題のテキスト

問題のテキストというのは、『精神現象学』の「序論」の結末に近い箇所、ヘーゲルが自らの哲学観を披瀝する件で、安易で通俗的な哲学観を靴の比喻を使って痛烈に皮肉る文章である。

ヘーゲルは言う。「学」(哲学)の研究において大切なことは、概念の努力を身に引き受けることである。つまり、現実の内容をそのまま正しく概念によって把握することが大切である。ところが、世の中の人はいくつもの努力を払おうとせず、哲学を安易に考えている。一方では、現実の多様な素材の中に埋没し、次々と現れる素材をひたすら辿って進む常識の態度がある。こうした態度は、素材に振り回される偶発的な意識の態度であって、素材から身を引き離し、素材を統一的な全体として純粋に把握するということは苦痛であり困難である。他方ではまた、常識の態度とは正反対に、現実の素材や内容から自由であることを誇りとし、形式的な思考だけで真理を把握できるとする自惚れの態度がある。こうした態度においては、現実の内容と思考の論理とが分離しており、どのような内容をも処理し説明する思考形式の整合性や一貫性は、その実、内容を否定することしか知らない空虚な認識でしかない。

さらにまた、哲学に対する第3の態度として、論証という認識の手続きを全く経ないで直接に、真理を既に出て来た完全な形で保持していると主張する神秘主義的な態度がある。何らの媒介も経ないで真理を認識できるとする態度は、他の人に向かってその真理を証明する必要を認めず、一方的にその真理の根源性を主張するばかりか、さらに、他の人の考えを断定的に評価するという偏執的な態度になりがちである。こうした態度は、直観の輝きと確信の強さによって哲学の面目を發揮しているようでいながら、真実には、開かれた思考と緻密な論理によって現実を認識しようとする哲学の精神に反するものであることは容易に理解できることである。

哲学に対する以上3つの態度は、ヘーゲルの時代においてばかりではなく、今日においても広く一般に見られる光景であろう。常識の無責任な好奇心に迎合して、次々と起きる雑多な事件の報告に奔走するジャーナリズム。生の現実から距離をとり、知識の一般性の立場から事実の直接性に対して冷笑的に説明して満足する学問の世界。そして、混乱した現実を救済すべく神秘的な世界像を提唱する精神の指導者たち。これらはいずれも哲学に対する要求に根差しながら、哲学の精神を実現する努力を共有しない人たちである。こうした世間の無理解を、その時代においてヘーゲルは、哲学の危機と受け止める。そして、「哲学することを再び真剣な仕事にすること」<sup>(4)</sup>の必要性を力説して、次のように続ける。(引用はホフマイスター版による。)

〔原文〕

Von allen Wissenschaften, Künsten, Geschicklichkeiten, Handwerken gilt die Überzeugung, daß, um sie zu besitzen, eine vielfache Bemühung des Erlernens und Übens derselben nötig ist. In Ansehung der Philosophie dagegen scheint jetzt das Vorurteil zu herrschen, daß, wenn zwar jeder Augen und Finger hat, und wenn er Leder und Werkzeug bekommt, er darum nicht imstande sei, Schuhe zu machen — jeder doch unmittelbar zu philosophieren und die Philosophie zu beurteilen verstehe, weil er den Maßstab an seiner natürlichen Vernunft dazu besitze, — als ob er den Maßstab eines Schuhs nicht an seinem Fuße

ebenfalls besäße.<sup>(5)</sup>

この原文に対する日本語訳は、例えば金子武蔵訳によれば、次の通りである。

〔訳文〕

すべて他の学芸や技能や手仕事については、これらを我がものとしてもつためには、これらを学習し練習するうえにおいて、さまざまな苦勞が必要であるという確信が妥当しているのに、これに対して哲学に関しては、当今では次のような先入見が支配しているようである。即ちたとい誰でも目と指とをもっていても、鞣皮と道具とを入手しただけでは、靴を作ることはできないにしても、——生れながらの理性において哲学することに対する物差しをもっているから、誰でもすぐに哲学することが、また哲学を批評することができるという先入見が支配しているのであるが、——これではまるで誰も自分の足において靴の物差しをもたぬかのようである。<sup>(6)</sup>

### 3. 理解が困難である理由

前節で引用した箇所ではヘーゲルが言わんとしていることは、前後の脈絡からも、あるいは、前後の脈絡から切り離して引用箇所だけを見ても、きわめて明白である。すなわち、哲学することは、世間一般が考えているようには簡単に身に付かない、あらゆる学問や技術などにおけると同様に、そのための学習や練習に多くの苦勞を費やさなければならないのだ、このことだけである。ヘーゲルの哲学観の要点だけを理解するのが目的であれば、こうした理解で十分であろう。

ところが、ヘーゲルのテキストを行を追いつつながら逐一読んでいくと、最後の文章の所（下線部）で普通の読解力は暗礁に乗り上げて、突然、思考が停止した状態になる。分かりやすい何気ない文章が、最後の所で急に難解な判じ物に転じてしまうのである。では、なぜ理解できなくなるのだろうか。その理由をまず明確にしてみよう。

#### (1) 文脈の流れ

文脈の流れはこうである。学問や技術などを身に付けるには、いろいろな学習や訓練が必要であること、これは一般に認められている。ところが、哲学に関しては、こうした一般的な常識に反するような、ある〈偏見〉(Vorurteil)が支配している。つまり、誰にも生まれつき理性が具わっているから、学習や訓練を積まなくても、誰でもすぐさま哲学することができるというのである。こうした〈偏見〉のおかしさをヘーゲルは、靴の比喩を使って痛烈に皮肉って批判する。すなわち、「これではまるで誰も自分の足において靴の物差しをもたぬかのようである。」

#### (2) 理解の頓挫する理由

ところで、この皮肉は皮肉であることは分かっても、〈偏見〉に対する的を射た皮肉になっているのかどうか、少しでも考えてみるならば、誰しも理解に苦しむを得ないであろう。

確かに、最後の文章は皮肉にはなっている。つまり、「これではまるで誰も自分の足において靴の物差しをもたぬかのようである」という文章が皮肉であるとすれば、その反対の内容、すなわち、「誰もが自分の足において靴の物差しをもっている」というのが誰もが認める自明の事実であるのでなければならない。そして実際、誰も自分の足に合わせて靴を作ったり買ったり

するのだから、足が靴の物差しであることを認めるだろう。その限りでは確かに、最後の文章はそれだけとして見れば、皮肉になっている。

ところが、〈偏見〉は、靴の場合で言えば「これではまるで誰も自分の足において靴の物差しをもたぬかのようなものである」という内容を、つまり、哲学に関して、「誰も自分の理性において哲学の物差しをもたない」ということを主張しているのかということ、全くその反対で、「誰もが自分の理性において哲学の物差しをもっている」ということを主張しているのである。

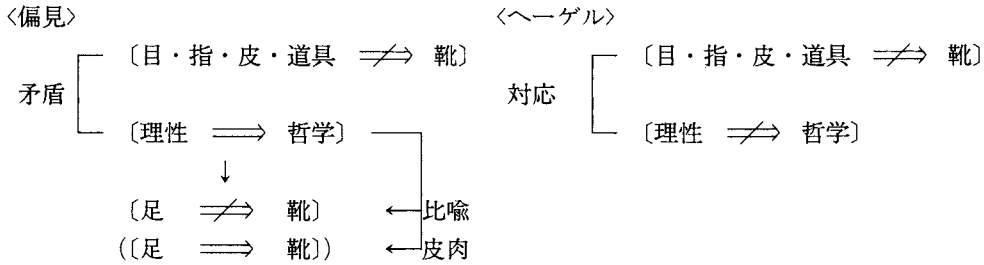
文脈の流れから言えば、誰にも生まれつき「理性」が具わっているから、誰でもすぐさま「哲学」することができるという〈偏見〉は、靴の場合に対応させると、誰にも生まれつき「足」が具わっているから、誰でもすぐさま「靴」を作ることができるという主張になるべきで、この主張のおかしさを、(実際は、足があるというだけでは簡単に靴を作ることはできないのに、そうできるかのように主張しているも同然なのだから)、「これではまるで誰も自分の足において靴の物差しをもっている(もたぬ、ではなく)かのようなものである」と皮肉るべきはずである。ところが、ヘーゲルのテキストはこうなっていない。「もっている」ではなく「もたぬ」という否定の表現になっている。理性と哲学の関係と、足と靴の関係とが素直に対応していないのである。

そこで今度は、前との繋がりを一貫させて、最後の文章を否定表現にしないで、「もっているかのように」としたらどうだろうか。すると今度は、この比喩が偏見に対する痛烈な皮肉であるという点に関して、それが果たして皮肉になっているのかが疑問に思われてくる。なぜなら、「これではまるで誰も自分の足において靴の物差しを持っているかのようなものである」という文章が皮肉であるためには、それが正しい常識に反する内容になっていなければならない。つまり、「誰も自分の足において靴の物差しをもたぬ」ということが疑いえない事実でなければならない。ところが反対に、誰でも自分の足に合わせて靴を作ったり買ったりするのだから、靴の物差しは足以外にない、これこそ紛れもない事実である。すると、「これではまるで誰も自分の足において靴の物差しを持っているかのようなものである」という文章は、誰もが認める事実と全く一致する考えであるから、皮肉にはならなくなってしまふ。

こうして問題のテキストは、確かに比喩を使った皮肉なのではあるが、皮肉であることを理解しようとすれば〈偏見〉に対する比喩であることがうまく理解できなくなり、反対に、〈偏見〉に対する比喩として理解しようとすれば皮肉にはならなくなってしまふという難解なテキストなのである。難解というのは大袈裟であるとしても、とにかく「これではまるで」分からないことだけは確かである。

### (3) 合理的な解釈の必要性

そこで、問題のテキストを〈偏見〉に対するヘーゲルの痛烈な批判として、文字通り解釈する道を探らなければならない。まず、比喩が比較として成立するためには、比喩によって明示されているものと暗示されているものとの対応関係が正しく付けられなければならない。つまり、〈偏見〉が哲学に関して主張していることと、それに対してヘーゲルが、それを靴の場合における主張として置き換えていることが正しく対応していなければならない。次に、その比喩が正しく成立したとして、さらに、それが痛烈な皮肉になるためには、それが皮肉として自明の事実と反する内容となっているのでなければならない。以上の2つの条件を満たすような解釈の可能性を見つけなければならないのである。



#### 4. テキストの比較検討

難解なテキストといっても、それは意味の次元における難解さである以前に、テキストそのものの表記上の不明瞭さであるのかもしれないから、まずテキストにおける異同を検討してみなければならない。

##### (1) ドイツ語

ドイツ語のテキストには、主なものに次の3種類がある。

###### ① ホフマイスター（哲学文庫）版

（既出）

###### ② ズーアカンフ版

.....Schuhe zu machen, jeder doch unmittelbar zu philosophieren.....<sup>(7)</sup>

###### ③ 新全集版

.....Schuhe zu machen — jeder doch unmittelbar zu philosophieren, und die Philosophie zu beurtheilen verstehe,.....<sup>(8)</sup>

新全集版が単語の表記を発表当時の古いものに行っていること（nöthig, sey など）を別にすれば、異同はコンマ(,)やダッシュ(-)の部分に関してだけであり、肝心の箇所に関しては、理解の手掛かりとなるような相違はない。

##### (2) 日本語訳

日本語には、わたしの確認できたものだけで次の4種類がある。

###### ① 金子武蔵訳（新訳）

（既出）

###### ② 金子武蔵訳（旧訳）

如何なる学・技術・熟練・手職に就いても、これ等のものを所有する為には、修得し練習するに当って多大の労苦が必要である、といふ確信が一般に認められて居る。然るに哲学に関しては、今日に於いては次の様な成心が跋扈して居る様に見える。「各人は目と指とを具えては居ても、鞣皮と道具とを得ただけでは、勿論靴を作ることはできない。が然し各人は如何に哲学し如何に評価すべきかを直接に心得て居る。と言ふのは各人はこれに対する規矩を自己の自然的理性に於いて所有して居るからである。」そこで欺かる成心を懐いて居る人人によれば、各人は靴を作る為めの規矩を自分の足に於いて所有しないことになる。（原文は旧漢字使用）<sup>(9)</sup>

## ③ 榎山欽四郎訳

あらゆる学、技術、熟練、手仕事などについては、それを手に入れるためには、学習と練習が必要であるという信念が一般に認められている。これに反し哲学については、現在、次のような偏見が支配しているように思われる。つまり、各人は目と指をもち、皮と道具を手に入れたからといって、靴をつくることができるわけではないのに、各人は、生まれつきの理性に尺度をもっているから、そのまま哲学的に思索し、哲学を判定することを心得ているというのである。これでは、まるで、各人が靴の尺度を自分の足にもっているのではないのかと反問しているのと同じである。<sup>(10)</sup>

## ④ 山本信訳

どんな学問や技術や技巧や手仕事についても、それを身につけるためには、苦勞をかきねて修得し練習する必要があることは、世間で一般に納得されている。ところが哲学については、逆の先入見がいまでは支配的になっているようである。それによると、だれもが目と指とをもっているからといって、皮と道具を手にしさえすれば靴が作れるというわけではないけれども、哲学の場合には、各人は自分の自然なままの理性においてそのための基準をもっているのであるから、いかに哲学し、いかに哲学を評価すべきかを直接に心得ている、というのである。これではまるで、靴の場合でも基準を自分の足にもっているのではないかのような口ぶりである。<sup>(10)</sup>

金子新訳、金子旧訳、そして山本訳は、訳文から察する限り、肝心の箇所の理解は基本において同じである。つまり、最後の文章は、理性を持っているというだけで哲学することができるとする〈偏見〉に対して、ヘーゲルが靴の比喩を使って皮肉を込めて批判しているのだというわけである。

もちろん、訳文から推察できるような理解を訳者が実際に抱いていたのかどうかは、全く保証の限りではない。なぜなら、一定の明確な理解を踏まえていなくても、あるいは、内容の理解に根本的な疑問を抱いていたとしても、翻訳は翻訳として行われうるからである。そして実際にも、上記3つの訳の場合、訳者がこの部分に関して理解の困難さを指摘してはいない以上、訳者の理解を確認することは不可能である。

そこで残る榎山訳であるが、これは、それ以外の3つの訳とは異なる理解に立った訳文であることは明らかである。榎山以外の訳では、ヘーゲルが〈偏見〉の主張を靴の比喩に置き換えて皮肉っているという理解で共通していると「思われる」のに対して、榎山訳では、最後の文章は、〈偏見〉の側が、その主張を靴の比喩を使って反語的に補強していると理解しているように「思われる」。つまり、「理性を持っているというだけで哲学することができる」とする〈偏見〉の主張は、靴の比喩では、「靴の尺度は誰でも自分の足にもっている」という主張になるはずであり、靴についてのその分かりやすい事実を使って、偏見が自分の主張を反語的に、「各人が靴の尺度を自分の足にもっているのではないのか」と一般の人に向かって訴えていると理解しているように「思われる」。したがって、否定詞 nicht は、表面上は否定であるが、反語の意味で使われているので、内容的には、その反対の肯定的な内容を暗示する機能を果たしているわけである。

榎山訳は、おおよそ以上のような理解に基づいて翻訳しているように「思われる」。「反問」という言葉を使って翻訳している点においても、以上のような理解が推定されるのであるが、

この理解もあくまで推定であって確かなものではない。というのも、訳文の「これでは、まるで、-----反問しているのと同じである」となっている点を見ると、その反語を使った訴えは、またまたヘーゲルの立場からの批判的な受け止め方となっていて、果たしてヘーゲルがそうした反語的な主張をどう見ていたのかが逆に分かりにくくなってしまい、全体としては再び非常に屈折した文章になってしまっているからである。

檜山訳で問題となるのは、最後の文章が〈偏見〉の側からする反語表現かどうかという点である。反語表現と理解すれば、確かに、理性と哲学の関係と足と靴の関係は素直に対応し、靴の比喩は比喩として正当に成立することになる。(既に指摘したように、比喩として成立したとしても、今度は反対に、〈偏見〉に対するヘーゲルの皮肉としては成り立たなくなるのであるが。)

しかし、問題の文章は本当に反語表現なのだろうか。それが反語表現だとすれば、「(各人が哲学の尺度を自分の理性にもっている、つまり、) 各人が靴の尺度を自分の足にもっている」という肯定的な内容を否定詞を使って、「もっているのではないのか」という檜山訳を読みやすく訂正すれば)「各人が靴の尺度を自分の足にもっているのではないか」という否定的な表現に変えていることになる。

そこで注意すべきは、否定詞 nicht の位置である。否定詞 nicht は、besäße という動詞の前ではなく、an seinem Fuß という句の前にある。するとこれは、「もっている(の)ではない(の)か」ではなく、「自分の足に(もっているの)ではない」というふうに、「自分の足」にもっていることを否定しているとするべきではないだろうか。つまり、問題の文章は〈偏見〉の側からする反語表現ではなく、ただの否定表現であり、その否定的な内容がヘーゲルの考える〈偏見〉の主張(あるいは、隠れた主張)だと取るべきではないだろうか。

以上4つの訳文を見てみた訳であるが、訳文がどういう理解を示しているのかはあくまで推察の域を出ない。テキストの理解は依然として解釈者の手に委ねられている。

### (3) 英語訳とフランス語訳

そこで日本語訳以外の翻訳を見てみることにしたい。わたしが手元で確認できた翻訳は次の3種類である。

#### ①ペイリー訳

In all spheres of science, art, skill, and handicraft it is never doubted that, in order to master them, a considerable amount of trouble must be spent in learning and in being trained. As regards philosophy, on the contrary, there seems still an assumption prevalent that, though every one with eyes and fingers is not on that account in a position to make shoes if he only has leather and a last, yet everybody understands how to philosophize straight away, and pass judgement on philosophy, simply because he possesses the criterion for doing so in his natural reason — as if he did not in the same way possess the standard for shoemaking too in his own foot. <sup>(12)</sup>

#### ②ミラー訳

In the case of all other sciences, arts, skills, and crafts, everyone is convinced that a complex and laborious programme of learning and practice is necessary for competence. Yet when it comes to philosophy, there seems to be a currently prevailing prejudice to the effect that, although not everyone who has eyes and fingers, and is given leather and last,

is at once in a position to make shoes, everyone nevertheless immediately understands how to philosophize, and how to evaluate philosophy, since he possesses the criterion for doing so in his natural reason — as if he did not likewise possess the measure for a shoe in his own foot. <sup>(13)</sup>

③イポリット訳

Pour toutes les sciences, les arts, les talents, les techniques, prévaut la conviction qu'on ne les possède pas sans se donner de la peine et sans faire l'effort de les apprendre et de les pratiquer. Si quiconque ayant des yeux et des doigts, à qui on fournit du cuir et un instrument, n'est pas pour cela en mesure de faire des souliers, de nos jours domine le préjugé selon lequel chacun sait immédiatement philosopher et apprécier la philosophie puisqu'il possède l'unité de mesure nécessaire dans sa raison naturelle — comme si chacun ne possédait pas aussi dans son pied la mesure d'un soulier. <sup>(14)</sup>

これら3つの訳文について共通して言えることは、3者とも、榎山訳以外の3つの日本語訳と同様に、「これではまるで誰も自分の足において靴の物差しをもたぬかのような意図、すなわち、「もたない」という否定的な内容の非現実の仮定、「まるで……もたぬかのような意図」という意味の翻訳になっていることである。反語表現として理解していると思われる翻訳はない。

それ以外で目に留まる異同は、ドイツ語の>Maßstab<の訳し分けである。ヘーゲルの原文では、哲学の場合も靴の場合も、その「物差し」の意味の言葉は同じ>Maßstab<である。これに対して、ベイリー訳では、哲学の場合は'criterion'であり、靴の場合は'standard'である。同じくミラー訳でも、哲学の場合は'criterion'であり、靴の場合はベイリー訳と違って'measure'である。フランス語のイポリット訳でも、哲学の場合は'l'unité de mesure nécessaire', そして靴の場合は'mesure'と訳し分けられている。こうした訳し分けは、ドイツ語では同じ単語である>Maßstab<が、哲学の場合の理性においては「規準・尺度」（はかるもの、単位）という意味であり、靴の場合の足においては「規格・寸法」（はかられたもの、度量）という意味であるために、それを明確にするために、あるいは、英語やフランス語ではそれぞれ別の単語によって意識される意味であるためにとられた処置であると思われる。

では、どうしてドイツ語原文では同一の単語>Maßstab<が使われているのだろうか。一つには、同一の単語を使わなければ、靴作りの場合と哲学の場合とを同一の事情にある事柄として比較することができないという、修辞上の理由がある。もう一つには、実質的に>Maßstab<という単語が靴作りの場合と哲学の場合とで、その基本的な意味において変わらないということが考えられる。すなわち、自分の足の寸法に合わせて靴を選ぶ時、足の大きさや形といった「寸法」が靴の選択の「規準」になるわけであるから、>Maßstab<という単語は、異なった意味をもっていながらもしかし、その基本的な意味においては共通しているのである。したがって、ヘーゲルの修辞上の意図を生かすならば、翻訳の場合、>Maßstab<は同一の単語によって訳すべきであろう。この点、日本語訳では、>Maßstab<は「物差し」「規矩」「尺度」「規準」と翻訳によってさまざまに訳されているが、いずれの翻訳においても、靴作りの場合と哲学の場合とで同じ訳語が用いられている。<sup>(15)</sup>これは、原文からしても、ヘーゲルの意図からしても、正当な処置である。



しかし、問題の箇所に関しては、これら英語やフランス語の翻訳もまた、理解の困難さについて特に指摘しているわけではないので、それらがどういう理解の下で翻訳しているかを確認することはできない。哲学の場合は「(尺度を)もっている」という肯定表現であるのに対して、靴の場合は「(寸法を)もってはいない」という否定表現になっているという対応の不自然さを翻訳者の誰もが問題にしていなかったというのは、何とも不可解なことである。

## 5. 同じ比喩が使われている他のテキスト

そこで次に検討してみるべき手段として考えられるのは、靴の比喩をヘーゲルがどこか別の箇所でも使っていないかどうかを探ることである。これに関しては、金子訳が既に参照箇所を指摘している。それは次の2箇所である。

### (1) 『エンチュクロペディ』第5節

人々は哲学をあなどって、苦心して哲学を勉強したことのない人々さえ、自分は哲学がどのようなものであるかを生まれながらに理解しているというような口をきき、またそんないいかげんな哲学的教養しかない人々が、特に宗教的感情を據りどころとして、哲学したり哲学を批判したりする能力があるというような口をきいたりするのである。他の学問の場合には、それを知っているにはあらかじめそれを研究していなければならぬということ、そしてそうした知識があってはじめてそれにかんして判断をくだす権利があるのだということを人々は認めている。また靴を作るには、たとえすべての人が足を持っていて、それを型とすることができ、すべての人が手を持っていて、そのうちに仕事に必要な能力を具えているにせよ、あらかじめ靴の作り方を学びかつ練習していなければならぬ、ということの人々は認めている。かれらは、哲学にだけはそうした研究や学習や努力が必要でないと思っているのである。<sup>(16)</sup>

### (2) 『哲学史講義』第3部「近世哲学」第3節「最近のドイツ哲学」A「ヤコービ」

そして人が何処へ行っても眼にするのはただヤコービの思想のみであり、そのばあい当然直接知が哲学的認識や理性に対立せしめられる、そうしておいて後彼等は宛も盲人が色に就て語る如く理性や哲学等々に就て喋々するのである。人はたとえ靴型や足や否手まであっても靴屋でなくては靴が造れない事は成程承認するであろう。然るに哲学に就ては直接知の立場に立てば、各人が常住座臥の儘で哲学であり、たとえ彼がどんなに否定しようとも、哲学に通じているという見解を抱くのである。(原文は旧漢字使用)<sup>(17)</sup>

参照箇所のそれぞれについて、下線部に該当する部分をドイツ語テキスト(ゾーアカンプ版)から示せば、次の通りである。

#### (1) Bd. 8 S. 46

Man gibt zu, daß, um einen Schuh zu Verfertigen, man dies gelernt und geübt haben müsse, obgleich jeder an seinem Fuße den Maßstab dafür und Hände und in ihnen die natürliche Geschicklichkeit zu dem erforderlichen Geschäfte besitze.

#### (2) Bd. 20 S. 323

Man gibt zwar zu, daß einer keinen Schun machen könne, wenn er nicht Schuhmacherist, obgleich er das Ma<sub>2</sub>, den Fuß hat und auch die Hände.

これら2箇所が使われている靴の比喩の意味はきわめて明快である。つまり、誰でもが足を持っているからといって、それだけで靴が作れるわけではない、靴が作れるためには、学習や

練習を積み重ねる努力が必要だという意味である。そして、人々は一般に、靴に関してはこうした事情を認識しているのに、こと哲学に関しては全く正反対のこと、すなわち、学習や練習の努力を払わなくても、(宗教的感情や直接知を持っていれば、それだけで)すぐさま哲学することができるのだ、という安易な考え方をしているとヘーゲルは批判するわけである。

もし、以上2箇所における靴の比喻の使い方がヘーゲルの本来意図しているところであるとすれば、問題の『精神現象学』「序論」における靴の比喻も、同様の意味に理解すべきであろう。確かに、「序論」における靴の比喻は、靴作りと哲学を対比させるだけの参照箇所の場合とは違って、「学習や練習の努力を払わなくても、哲学することなんて誰でもすぐさまできるのだ」という〈偏見〉の主張が、もう一度、靴の比喻で言えばどういうことを主張していることになるかを示すという、反対方向で使われている。しかし、靴作りと哲学との対応関係を見失わなければ、比喻は次のようになるべきである、すなわち、「まるで誰でも靴の尺度を足にもっているから、それだけで靴が作れるかのように」、あるいは短く、「まるで誰でも靴の尺度を足にもっているかのように」となるべきはずである。これならば、靴の比喻をヘーゲルは終始一貫、同じ趣旨で使っていることになる。

ところが、「序論」においては「まるで誰でも靴の尺度を足にもっているのではないかのよう」になっていて、靴の比喻が反転してしまっている。ここでも再び、わたしたちは振り出しに送り返されることになるのである。

## 6. いくつかの解釈

そこでいよいよ問題のテキストについて、一体どのような解釈が可能か、いくつかの可能性を順次提示し、それぞれについて検討していくことにしよう。

### (1) 単なる誤記

まず初めに考えられるのは、問題のテキストの難解さを必要以上に真剣に受け止めることを放棄し、それをヘーゲルの単なる混乱や錯誤と見なすことである。哲学のテキストとは言っても、それが書かれる段階で、一字一句、一文一文の全てが入念に推敲されているわけではないし、また、それを読む段階でも、一字一文でも理解できなければ全く読めないというわけではない。哲学に限らず普通一般に、人は話す時でも文章を書く時でも、全ての意味を明確に把握しながら話したり書いたりしているわけではない。だとすれば、それ程テキストの字句にとらわれなくてもよいではないか、おおよその趣旨が理解できれば著者の意図は十分に伝達されたと考えてもよいではないか、こういうわけである。

確かに問題のテキストは、最後の文書が難解であるとは言っても、その前後の文脈からすればヘーゲルの意見はきわめて明確に理解されるものである。それにまた、最後の文章は、たとえ難解であるとは言っても、その難解さとは哲学思想の重大な核心に関わるような内容上のものでなく、ただ単に文章表現の技巧上のもの、すなわち、修辞上のものに過ぎない。だとすれば当然、必要以上にその難解さにこだわる必要はないと思われる。難解をもって知られるヘーゲルのテキストでも、この場合は、その難解さは単に修辞上のものである、そして、そうした表現上の混乱が生じたのは、執筆当時のヘーゲルの状況によるのだ(1806,7年のヘーゲルを年譜で確かめよ)<sup>(18)</sup>、こう考えても何ら不都合はないであろう。字句にこだわらなければ、そう考

えるのが一番自然であろう。

しかし、こうした解釈は、難解さを正面から扱わないのであるから、解釈と言うよりはむしろ解消である。表現上の混乱がなぜ生じたか、事実的な理由によって説明し解消するのではなく、その論理的な理由を解明することによって解釈すること、この作業こそが学問的読解の要求するところであろう。

## (2) 必要条件か必要十分条件か

問題のテキストを解釈するということは、比喩と皮肉が衝突し合っている混乱を解きほぐし、両者を相互に矛盾なく成り立たせるような筋道を探し出すことである。その筋道はしたがって、比喩の方から探すか、それとも反対に、皮肉の方から探すか、2通り考えられる。〈偏見〉の主張を靴の比喩で正しく言い換えた時、その比喩が皮肉にならないのはなぜか、あるいは、靴の比喩を皮肉として使おうとした時、皮肉として正しい皮肉が〈偏見〉の主張の比喩としては正しくなくなってしまうのはなぜか、いずれかの理由を探れば解釈は成功すると期待できる。そこでまず、靴の比喩を比喩として確保していく道を進んでみよう。

〔分析〕

〈偏見〉の主張はこうである。

①「理性という哲学の尺度 (Maßstab) があるから、誰でも哲学することができる。」

これを靴の場合に置き換えると、

②「足という靴の尺度があるから、誰でも靴を作ることができる。」

哲学についての〈偏見〉の主張は、靴の場合について上述の内容を主張しているのと同じ(比喩)になる。

③「まるで誰でも足という靴の尺度をもっている(靴の尺度を足にもっている) (から、靴を作ることができる) かのよう。」

ところが、実際のヘーゲルの文章は③ではなく、次のようになっている。

④「まるで誰でも足という靴の尺度をもっているのではないかのよう。」

これは、上の③の括弧内の文章(条件文の帰結の部分)を、それに応じて変えて補えば、次のようになる。

⑤「まるで誰でも足という靴の尺度をもっているのではない (から、靴を作ることができるのではない) かのよう。」

この⑤の文章は、②を否定したものである。すると、この文章は②、ひいては①をそのまま比喩の形で言い換えたものではなく、②、ひいては①を否定した内容を比喩の形で言い換えたものということになる。つまり、⑤が比喩の形で示そうとしているのは、①の内容ではなく、それを否定した内容なのである。

⑥「理性という尺度があるのではないから、誰でも哲学することができるのではない。」本来①を靴の比喩を使って皮肉べきだが、どうしてヘーゲルは⑥を比喩の対象にしてしまったのだろうか。その理由は、ヘーゲルが比喩を考える時、①ではなく⑥をごく自然に思い浮かべてしまったからだと考えられる。しかも、⑥の文章の内でも特に後半部、すなわち、「誰でも哲学することができるのではない」が念頭にあったのではないかと考えられる。なぜなら、⑥の前半部、すなわち、「理性という尺度があるのではない」、誰でもが理性という尺度をもっているわけではないということは、ヘーゲルも当然認めないだろうからである。ヘーゲルは「誰でも哲

学することができるのではない」ということは認めても（だからこそ、それを比喩に対象として念頭に浮かべたのだ）、それは、誰もが理性という尺度を持っているわけではなく、理性を持たない人もいるから、という理由は認めてはいない。そうでなければ、⑤は皮肉にならなくなってしまふ。⑤が皮肉であるとすれば、ヘーゲルは当然「誰でも足という靴の尺度をもっている」ことを、つまり、「誰でも理性という哲学の尺度をもっている」ことを認めているからである。

ヘーゲルが⑤の皮肉な文章を①ではなく⑥を念頭に置いて書いたであろうことは、比喩の成立条件からすればほぼ確実である。では⑤は、どうして〈偏見〉に対する痛烈な皮肉になるのだろうか。それは、⑤の対象である⑥の前半部に対する、〈偏見〉とヘーゲルの考え方の相違に求められるだろう。

〈偏見〉は①と考えているのであるから、哲学することができないとすれば、それは当然、理性をもたないからだと考えていることになる。ところがヘーゲルは、〈偏見〉とは違って①のように考えているわけではない。ヘーゲルは、〈偏見〉も靴に関してならば認めていること、つまり、理性を持っているからと言って誰でもすぐさま哲学することができるわけではなく、それができるためには学習や練習が必要だと考えている。そこで、ヘーゲルからすれば、哲学することができないとすれば、それは理性をもたないのではなく、そのための学習や練習に努力を払わないからだということになる。要するに、理性が哲学の尺度であることを認める点ではヘーゲルも〈偏見〉と同じだが、両者が決定的に異なるのは、〈偏見〉がそれを必要十分条件として考えているのに対して、ヘーゲルが必要条件ではあっても十分条件ではないと考えている点である。〈偏見〉とヘーゲルとの間にあるこの決定的な相違が、⑤の文章〈偏見〉に対する痛烈な皮肉にしているのである。

#### 〔解釈〕

こうしてようやく問題のテキストにおける比喩と皮肉の衝突は回避されたことになる。隠された部分を補いながらテキストの筋道を辿り、解釈の成果を整理しておくことにしよう。

- ・「理性という哲学の尺度を持っているから、誰でもすぐに哲学することができる。」
- ・ところが、誰でもすぐに哲学することができるわけではない。
- ・〈偏見〉も、誰でもすぐに靴が作れるわけではないのを認めているのだから、哲学に関しても、誰でもすぐに哲学することができるわけではないことを認めるべきでしょう。
- ・その事実を認めるならば、〈偏見〉の考えがどんなにおかしいか、すぐ分かりますよ。なぜなら、哲学することができないとすれば、それは、〈偏見〉の理屈に従えば、理性をもたないからだということになるからです。
- ・これは、靴の場合に置き換えれば、靴を作ることはできないのは、靴の尺度を足にもたないからだ、ということを行っていることになるからですよ。
- ・「これではまるで誰も自分の足において靴の物差し (Maßstab) をもたぬかのようなのである。」
- ・ところが、誰でも足という靴の尺度はもっている。靴を作ることはできないのは、ただ足という尺度が靴を作るための必要十分条件ではないからである。

#### 〔解釈の要点〕

##### ※ 1

比喩が反転したのは、「誰でもすぐに哲学することができるわけではない」という、〈偏見〉の主張とは正反対の事実を前提にしたからである。そして、その事実が、ヘーゲルが比喩を考える時にその前提として容易に念頭に浮かんだのは、〈偏見〉もまた靴に関しては「誰でもすぐ

に靴を作ることができるわけではない」ということを認めていると考えたからである。

## ※ 2

皮肉になるのは、「誰でもすぐに哲学することができるわけではない」という事実に対する理由が、〈偏見〉の場合、「理性」を哲学するための必要十分条件と考えているために、ほかならぬ「理性」(靴における足) そのものの否定になってしまうからである。

これは、いわゆる「逆は必ずしも真ならず」ということの指摘である。ヘーゲルはこう考える。哲学をするためには確かに理性が必要である。しかし、だからといって、哲学ができないのは即、理性を持たないことを意味するわけではない。哲学をするためには、理性を持っているというだけでは不十分で、学習や練習の努力も必要だ、だから、哲学ができないのは理性を持たないことを直ちに意味するわけではなく、学習や練習の努力が足りないことを意味する。ところが、〈偏見〉は、理性を哲学するために必要十分条件と考えてしまっているから、哲学することができないことが直ちに理性をもっていないことを意味すると言わざるを得なくなってしまう。これは滑稽なことではないか。それは、靴の場合で言えば、足に靴の尺度をもたない、足が靴の尺度ではない、ということを行っていることになるだろう、というわけである。

### (3) 皮肉のねじれ

前の解釈は、比喩が比喩として成り立つ条件を探り出すことによって、最後の文章がどういう意味での皮肉になっているかを解明する道であった(比喩から皮肉へ至る道)。そこで今度は、最後の文章が皮肉として成り立つための条件を探り出すことによって、靴の比喩が〈偏見〉の主張と食い違っているように見えるにも関わらず、ほとんどの翻訳者によってその不自然さが注目されてこなかった理由を明らかにしてみよう(皮肉から比喩に至る道)。

最後の文章は、〈偏見〉の主張を靴の比喩に置き換えたものであると同時に、それによって〈偏見〉の主張の滑稽さを皮肉の趣旨の文章である。ところで、比喩と皮肉とでは修辞上どちらが読者に対する印象が強いだろうか。それはもちろん、皮肉であろう。なぜなら、比喩は不完全でも読者に比喩であることは分かってもらえるが、不完全な皮肉は皮肉であることさえわかってもらえなくなるからである。そこで、最後の文章が、「〈偏見〉に対する」皮肉になっているかどうかはともかく、「一つの」皮肉にはなっているはずだという前提でテキストを分析してみよう。

[分析]

#### ①「これではまるで誰も自分の足において靴の物差しをもたぬかのようである。」

この文章が一つの皮肉になっているとすれば、それはどうしてだろうか。皮肉は自明の事実と反する内容だから皮肉になるのである。例えば、どうみても美しい字とは見えない字を書いている人に向かって、「うまい字を書くね」と言うから辛辣な皮肉になるのである。だとすれば、この場合も、①が皮肉になるのは、①の反対の内容、すなわち、②「誰も自分の足において靴の物差しをもっている」ということが自明の事実だからでなければならない。そして確かに、このこと自体は誰もが認める事実である。

ところが、①が一つの皮肉だとしても、皮肉というのはその相手に的中しなければ皮肉にはならない。例えば、「うまい字を書くね」という言葉が皮肉になる相手は、どうみてもうまくない字を書く人でなければならない。うまい字を書く人に向かって「うまい字を書くね」と言うのは、皮肉ではなくて素直な賛辞である。そこで、①が〈偏見〉に対する皮肉だとすれば、〈偏

見〉は「誰も自分の足において靴の物差しをもっている」という自明の事実と反する内容、すなわち、「誰も自分の足において靴の物差しをもたない」に相当する内容を主張しているのではない。しかし、〈偏見〉は、靴に置き換えて言えば、「誰も自分の足において靴の物差しをもたない」という自明の事実と反する内容ではなく、③「誰も自分の足において靴の物差しをもっている」と自明の事実の方を主張しているのである。〈偏見〉は実際、哲学に関して、④「誰も自分の理性において哲学の物差しをもっている」ということを主張しているのである。

こうして最後の文章は、以上見るかぎり、「一つの」皮肉としては成り立ってはいても、「〈偏見〉に対する」皮肉としては成り立っていない文章である。相手に的中しない皮肉は皮肉ではないと考えるならば、最後の文章は明らかに修辭的に失敗した表現である。この明白な失敗はどうして注目されてこなかったのだろうか。

④「誰もが理性に哲学の尺度をもっている。」(〈偏見〉の主張)

③(「誰もが足に靴の尺度をもっている。」)

↑×〔〈偏見〉に対する皮肉としては失敗〕

①「これではまるで誰も自分の足において靴の物差しをもたぬかのようなものである。」

↓○〔一つの皮肉としては成功〕

②「誰もが足に靴の尺度をもっている。」(自明の事実)

最後の文章が〈偏見〉に対する皮肉として、〈偏見〉という相手に的中するための条件は一体何だろうか。最後の文章を、哲学に関する〈偏見〉の主張を直接の対象とした皮肉と受け取ると(文章を逐って読んでみるとそうするのが自然だろうが)、皮肉は〈偏見〉に的中しない的外れな皮肉になってしまう。そこで、ヘーゲルが〈偏見〉を皮肉ってやろうと考えた時、皮肉の対象としたのは、「誰もが理性という哲学の尺度をもっている」という主張ではなく、〈偏見〉考え方全体の非整合性だと考えてみることにしよう。つまり、こうである。

〔解釈〕

・〈偏見〉は靴の場合と哲学の場合では事情が別だと考えている。

「目や手を持っているからといって、誰もが靴を作れるわけではない。」(靴の場合)

「理性を持っているから、それだけで誰もが哲学することができる。」(哲学の場合)

・ところが、2つの場合を比喻を使って一緒にすると自己矛盾に陥る。

「誰もが足に靴の尺度を持っている」が「誰もが靴を作れるわけではない。」

・〈偏見〉の自己矛盾を突くには、2通りの皮肉が考えられる。

「誰もが足に靴の尺度を持っている」から「誰もが靴を作ることができる。」

→皮肉1「まるで誰もが靴を作ることができるかのように。」

「誰もが足に靴の尺度を持っているのではない」から「誰もが靴を作れるわけではない。」

→皮肉2「まるで誰もが足に靴の尺度をもっているのではないかのように。」

・ヘーゲルは皮肉2を採用した。

「これではまるで誰も自分の足において靴の物差しをもたぬかのようなものである。」

〔解釈の要点〕

※1

ヘーゲルが皮肉の対象としたのは、直前の文章、「誰もが理性という哲学の尺度を持っている」

という〈偏見〉の意見ではなく、靴に関してと哲学に関してとで異なる意見を主張している〈偏見〉全体の矛盾である。

文章の流れからすると、最後の皮肉を込めた文章は、比喩を使っている点で、しかも、比喩の対応関係からして当然、直前の文章を対象にしていると受け取られるのである。そうすると、〈偏見〉に対する皮肉であるはずなのに、比喩の点からすると、〈偏見〉の主張と内容的に一致しなくなり、皮肉は的外れになっているような印象を受けるのである。

### ※ 2

皮肉が決定的外れではなく、〈偏見〉に的中しているとすれば、それは〈偏見〉の自己矛盾を突いているからである。そして、その自己矛盾とは、哲学に関する主張から導かれる「誰もが足に靴の尺度を持っている」ということと、靴に関する認識から導かれる「誰もが靴を作ることができるわけではない」ということとが、哲学に関する〈偏見〉の主張とは裏腹に一致しなくなることである。

本来ならば、「誰もが足に靴の尺度を持っている」から「誰もが靴を作ることができる」となるか、「誰もが足に靴の尺度を持っているのではない」から「誰もが靴を作ることができるわけではない」となるかのいずれかであるべきである。哲学に関する〈偏見〉の主張を靴の場合に置き換えると、足に関しては前者を、靴作りに関しては後者を〈偏見〉は主張していることになるのである。

もっとも、〈偏見〉が「矛盾」した事柄を主張していると見做しているのは、あくまでヘーゲルであって、当の〈偏見〉自身はそうした「矛盾」に全く気付いていないことに注意しなければならない。なぜなら、〈偏見〉は、靴作りの場合と哲学の場合とを同列に論じているわけではないし(靴作りの場合を比較の対象として持ち出したのはヘーゲルなのだ!)、たとえヘーゲルの指摘しているように、両者の場合で異なった正反対の内容を主張したからといって、それだけでは自己矛盾しているということにはならないからである。靴を作るのは簡単ではないが、哲学することは簡単だと言っても、仕事の種類が違うのだから難しさが違って当然で、そうした認識に何ら矛盾があるわけではない。しかし、哲学することはそれほど簡単な仕事ではないと考えるヘーゲルは、その難しさを靴作りの仕事を比較の対象として持ち出すことによって、哲学を安易な仕事と見做す〈偏見〉の考えを批判するのである。こうしたヘーゲルの批判は〈偏見〉からすれば意外も意外、全く思いも及ばぬことであろう。哲学に関する〈偏見〉の主張を、靴作りの仕事を例に出して強烈に皮肉というヘーゲルの仕方は、巧妙と言えれば巧妙であるが、意地悪と言えればこれ程意地悪なこともないであろう。

ともかく、「矛盾」は相対立する主張が同一の事柄に関係する限りにおいて成立するのであるから、靴作りと哲学を同一の事柄として論じるヘーゲルにとって「矛盾」と見える〈偏見〉の主張も、両者を別々の事柄と考える(であろう)〈偏見〉には全く「矛盾」ではないのである。そもそも〈偏見〉は靴作りの仕事など全く考えていないのだ!

### ※ 3

〈偏見〉の自己矛盾を皮肉る際に、既に示したように、皮肉は2通り考えられるが、ヘーゲルは2番目の皮肉を採用したのである。この2番目の皮肉は、比喩の点で直前の文章と一致しないので、分かりにくい不親切な皮肉である。

普通の人には、1番目の皮肉を採用するのではないだろうか。この方がはるかに自然で分かりやすい皮肉になるはずである。

「誰もが哲学の尺度である理性をもっているから、哲学することができる。」(④)

→ (誰もが靴の尺度である足をもっているから、靴を作ることができる。) (③)

→ 「まるで誰もが靴を作ることができるかのように。」(皮肉 1)

※ 4

ヘーゲルの採った 2 番目の皮肉は、分かりにくい皮肉なのに、どうしてその不自然さがヘーゲルに意識されなかったのだろうか。そして、翻訳者や読者に着目されなかったのだろうか。その理由は「誰でも靴を作ることができるわけではない」という事実の重みにある。この事実<sup>1</sup>に抗して、1 番目の皮肉の場合のように、「まるで誰もが靴を作ることができるかのように」と皮肉るのは、ヘーゲルには、余りに現実離れした想定だと思われたのではないだろうか。それよりはむしろ、その事実<sup>1</sup>に反した〈偏見〉の考えの方を皮肉るべきだと思ったのではないだろうか。

もちろん、皮肉 1 も、「誰でも靴を作れるわけではない」という事実が事実として一般に認められているからこそ皮肉として成り立つのであって、この事実を踏まえなければならない点において、皮肉 2 と全く同様である。しかし、〈偏見〉の理屈からすれば、「誰でも靴を作れる」という、この事実<sup>1</sup>に反する内容が帰結することを提示してみせるよりも、ヘーゲルは、むしろ、この事実を共通の認識とすれば、この事実を説明する理由として、〈偏見〉の理屈からすれば、「誰も自分の足に靴の尺度をもたない」という何とも滑稽な説明になることを提示してみせた方が、〈偏見〉の矛盾した考えを一層鮮明に浮き立たせるものと考えたのであろう。

実際に、〈偏見〉も「誰でも靴を作ることができるわけではない」という事実を認めているのである(正確には、認めるだろう)から、その事実が皮肉 1 ではなく皮肉 2 を採用すべくヘーゲルを促したのであろう。事実を動かさないとすれば、事実<sup>1</sup>に反する結論を導く皮肉 1 ではなく、その事実<sup>1</sup>を説明する滑稽な理由を指摘する皮肉 2 の道しかないわけである。事実の重みが、ごく自然な皮肉 1 から不自然な皮肉 2 へと、皮肉をねじれさせたのである。現実主義者ヘーゲルの一面がここに顔を覗かせていると言ったら、言い過ぎだろうか。そして、翻訳者や読者は、多分、ヘーゲルの皮肉に強さに圧倒されて、比喩の不自然さに目を眩まされてしまうのである。

(4) ダッシュ (一)

問題のテキストは、以上 2 通りの解釈によって一定の理解に達したものである。そこで、こうした解釈を踏まえて、そして、できれば解釈の正しさを確認するために、元のテキストをもう一度振り返って見ることにしよう。すると、些細な事実がこうした解釈を背景に浮き彫りになってくるのに気付かされる。その事実とは、ダッシュ (一) である。ドイツ語原文のうちホフマイスター版と新全集版とは、引用した箇所には 2 箇所ダッシュが引かれている。

-----, ① er darum nicht imstande sei, Schuhe zu machen ----- ②-----, ③- als ob er den Maßstab eines Schuhes nicht an seinem Fuße ebenfalls besäße.

2 つのダッシュに挟まれた部分②は、〈偏見〉の哲学に関する考え方を述べた部分である。この部分を省略して、前後を直接に繋げて読めば、als ob 以下の文章③は、「靴を作ることにはできない」という事実に対する〈偏見〉の側からする「理由」として、つまり、〈偏見〉の理屈ではこういう理由によって説明するであろうとヘーゲルが考えていることとして、今や、素直に「難なく」読むことができるのである。

最後の文章③が比喩である点でも、皮肉である点でも、ヘーゲルがその前提として考えてい



たのは「誰もが靴を作れるわけではない」という事実であった。<sup>(19)</sup>では、その事実はどこに書かれているかと言えば、それは前のダッシュの前の文章①である。これまでの2通りの解釈は、③を①に関係付けるよう求めていたわけであるが、それはこの、前の方のダッシュによって指示されていたのである。

したがって、原文校訂者が前のダッシュを入れたことには明確な意図が推察されるのである。後ろのダッシュだけでは普通、その後の als ob 以下の文章③は、直前の点線部②に自然に繋げて読むであろう。そうすると、その繋がりが当然理解できなくなってしまう。ところが、前のダッシュを付けて、二つのダッシュに挟まれた部分を飛び越して、als ob 以下の文章③を前のダッシュの直前の文章①に繋げて読めるようにすると、ごく自然にはいかなくても、これまでの解釈が示したような方向で理解することができる。つまり、前のダッシュは、③を②にではなく①に繋げて読めという指示なのである。原文校訂者の炯眼に感服せざるを得ない。(もっとも、新全集版にもダッシュが入っているところからすれば、ヘーゲル自身がそう読むよう指示していたということになり、問題のテキストに関してヘーゲルは確かに不親切ではあっても、決して混乱していたわけではないということになる。)

こうした事情は文法的には次のように説明できるだろう。als ob 以下の文章③は、実質的には理由を述べる副文 (weil~) なのだが、その理由が事実ではなく、〈偏見〉の立場からして推定される「事実」なので、理由として事実を挙げる接続詞 weil を副文の冒頭に置くことはできない。そこで、als ob の非現実の仮定がそのまま裸で出てきたのだ。als ob 以下の文章③が理由を述べる副文であることは、ダッシュの前の文章①に否定詞があることから推定できる。つまり、[(主文) -----nicht-----, (副文) weil-----.] が本来のつながりであった。だが、先の理由によって接続詞 weil が脱落して、[(主文) -----nicht-----, (副文) (weil) als ob-----.] となったのだ、と説明できるだろう。

ちなみに、翻訳についてこのダッシュがどう受け継がれているかを見てみると、日本語訳では金子新訳だけがダッシュをそのままの形で入れている。しかし、金子旧訳では、〈偏見〉(成心)の内容が「各人は」以下括弧に入れられているので、最後の文章がどこにかかるのか、ダッシュをそのまま入れた新訳に比べて分かりにくくなっている。また、英語訳とフランス語訳では、いずれもダッシュは入っていない。

ダッシュが引かれている事実は、問題のテキストの理解の難しさと以上2通りの解釈の正しさを裏付けるものである。ダッシュの意味がこうして結晶して現れたのは、長い解釈の試みの結果においてであった。成果は大きかったと言うべきだろうか。それとも、余りにもわずかだったと言うべきだろうか。

## 7. 終わりに

ヘーゲルのテキストの読解は以上の通りである。この読解はもとより哲学思想の理解に貢献するものでは決してない。しかし、テキストの読解がどれほどの解釈を要求するものであるかを示す一例にはなったはずである。書かれているものは、どれほど多くの書かれていないものによって支えられていることだろうか。解釈とは、したがって、書かれているものを書かれていないものの上に再び根付かせる作業だと言えるのではないだろうか。

## 註

- (1) 「ニーチェ全集」(理想社)第3巻, 155頁。
- (2) G. W. F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, hrsg. von J. Hoffmeister, Felix Meiner. *Philosophische Bibliothek* (PhB), Bd.114, S.11,以下の訳文は金子新訳による。
- (3) *ibid.*
- (4) *ibid.* S. 54
- (5) *ibid.*
- (6) 金子武蔵訳『精神の現象学』, 岩波書店, 昭和46年, 上巻65頁。
- (7) Hegel, *Werke in zwanzig Bänden*, Suhrkamp, Bd. 3, S. 62f
- (8) Hegel, *Gesammelte Werke*, hrsg. von der Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften, Felix Meiner, Bd. 9, S. 46
- (9) 金子武蔵訳『精神現象学』, 岩波書店, 昭和7年, 上巻95頁。
- (10) 樫山欽四郎訳『精神現象学』, 河出書房新社, 昭和41年, 51頁。
- (11) 山本信訳「精神現象学序論」(世界の名著『ヘーゲル』), 中央公論社, 昭和42年, 142頁以下。
- (12) *The Phenomenology of Mind*, translated by J. B. Baillie, Harper Torchbooks, 1910. p.125
- (13) *Hegel's Phenomenology of Spirit*, translated by A. V. Miller, Clarendon Press, 1977, p.41
- (14) *La Phänomenologie de l'Esprit*, traduction de J. Hyppolite, Aubier Montaigne, 1941. pp57
- (15) >Maßstab<の訳語として最も無難なのは「尺度」ではないだろうか。なぜなら、「尺度」は先に指摘した2通りの意味をもっており、靴作りの場合と哲学の場合とに共通して使って最も違和感がないからである。  
『岩波国語辞典第4版』は、「尺度」の意味を次のように説明している。「①長さをはかる道具。ものさし。転じて、計算・評価などの規準・標準。②長さ。寸法。」この点、「物差し」は①の意味に偏り過ぎていて、「足に靴の物差しをもっている」という日本語表現の場合、理解しにくくなるおそれがある。また「規準」は、哲学を評価する「規準」、靴を選択する「規準」として、「尺度」の本来的な機能を両方の場合において共通して示すことができるから、これも適切な訳語であろう。
- (16) 松村一人訳『小論理学』, 岩波文庫, 上巻67頁以下。
- (17) 藤田健治訳『哲学史』, 岩波書店, 下巻の三, 64頁以下。
- (18) 『ヘーゲル事典』(弘文堂)「ヘーゲル詳細年譜」参照。
- (19) (2)※1, (3)※4参照。